

CONTENTS

自作自演222..... 八木紀彰・恒川和久 ..... 2

JIAに入会して ..... 岡野俊二・富田彰次 ..... 3

わたしのとっておき① ..... 川本直義 ..... 3

第5回 木造建築の語られ方

ジャパン・アズ・ナンバーワン ..... 竹内孝治 ..... 4

インタビュー 車戸慎夫 前支部長・矢田義典 新支部長に聞く ..... 6

2018年度東海支部・地域会役員構成 ..... 8

JIA 静岡発 まち歩きウォッチング

古地図を持って静岡の街を歩いてみよう ..... 石橋 剛 ..... 10

JIA 愛知発 住宅研究会 連続環境セミナー2018

図解で解決 空き家のパターン別すっきり解決法 ..... 宮坂英司 ..... 11

JIA 愛知発 住宅研究会 連続環境セミナー2018補習授業

環境ノイズエレメントを読む ..... 吉元 学 ..... 11

JIA 岐阜発 JIAの窓

会員設計の店舗併用住宅「一つ屋根の家」を見学 ..... 内田実成 ..... 12

東海支部役員会報告 ..... 長尾英樹 ..... 13

保存情報 第199回 木曾三川 ..... 林 廣伸 ..... 14

萬福寺 ..... 福田一豊 ..... 14

Bulletin Board ..... 15

地域会だより ..... 15

編集後記 ..... 川本直義・原眞佐実 ..... 16

設計図は語る 3

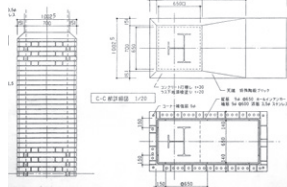
中京ゴルフ倶楽部石野コースクラブハウス

伊藤建築設計事務所 (1967[昭和42]年設立)

竣工後25年の節目を迎えるゴルフ場のクラブハウスで、外部仕上は屋根を玄昌石、軒裏を天然木(無垢材)、内外壁をレンガ積、建具を鋼製とし、維持管理のできる素材を組み合わせ、風格を持たせながら周辺の景観との調和をはかっています。

一般的な18ホールズのクラブハウスのほぼ倍近い延床面積は、ハウス周辺の景観保全のため、建物内に駐車場を取り込み、通常別棟にまとめることが多いキャディはじめ従業員のためのスペースを1棟にまとめたためです。

表紙の写真は、和紙に手書きで描いた断面詳細図の原図で、1992年作製のものでCAD図面が主流になる直前の時期にあたります。余白のスペースに部分詳細図を入れるなど、1枚の設計図になるべく多くの情報を盛り込むのが一般的でした。当時、CADによって作図した図面も、和紙に鉛筆プロッターで出力するという時代でした。



レンガ積部分詳細図 (CADで作図し和紙に鉛筆出力)



クラブハウス外観

所在地…豊田市芳友町  
竣工…1993(平成5)年  
構造…鉄骨鉄筋コンクリート造一部鉄骨造  
規模…地下1階地上2階建て 延床面積…9,568㎡  
設計監理…伊藤建築設計事務所  
施工…清水建設

森口雅文 (JIA愛知) | 伊藤建築設計事務所





## 八木 紀彰 (JIA 静岡)

八木紀彰建築設計事務所 (静岡市葵区大岩本町1-5-305 TEL 054-245-0186 FAX 054-245-0186)

### 『ARCHITECT』をきっかけに「静岡こども建築塾」を開催

私は2年前から、子どもたちに建築を教えるアートプログラム「静岡こども建築塾」を主宰しています。この6月にも、昨年に続き静岡市の静岡聖母幼稚園で出張講座を行います。元々は小学生を対象とした内容ですが、幼稚園と小学校の教育的連携が求められる現在、私の考えに賛同して下さった現場の先生方からご依頼があり、子どもたちの育ちに合わせた工夫をしながら取り組んでいます。

静岡こども建築塾の始まりは、『ARCHITECT』2016年3月号に掲載された、JIA 愛知の笹野さんの記事(プチ建築教室「紙コップタワーをつくらう」)を読んだことがきっかけでした。当時私は、小3の息子が通う児童クラブの先生から、春休みに何かできないかと相談を受けていたのですが、いい素材が見つからず悩んでいました。安全で使い勝手が良く、2時間くらいで終われるものと考えていた自分にとって、紙コップは発見でした(笹野さん、事業委員会の皆さまありがとうございます)。当日は小さな子どもたちに飽きずに興味を持ってもらえるよう自分でシナリオを考え、「積む」という行為につなげるために、石やレンガでつくられた世界の建築やまちの話をしてから紙コップタワーの制作を始めました。よく褒め、よく笑い、ちょっと粘って考えさせて、思い思いの素晴らしい作品ができました。それから2年間で、県内各地で8回程行ってきました。静岡県教育会館、浜松市鴨江アートセンターを拠点に、静岡県社会福祉協議会や焼津市教育委員会への出張講座。静岡新聞社の取材や、大学建築科へ進む静岡雙葉学園高校の生徒たちの参加など、出会いの中で少しずつ輪が広がりました。開催する地域の成り立ちも講義に取り入れ、楽しみながら学びを深めることを大切に、自由なスタンスで取り組んでいます。子どもたちには、個々の作品制作における協力や連携を通し、皆で建築やまちをつくっていくことを感じて欲しいと思っています。これからも新しい挑戦をしていきたいと思っています。



## 恒川 和久 (JIA 愛知)

名古屋大学工学部 (名古屋市 千種区不老町1 TEL 052-789-4398 FAX 052-789-2405)

### 働き方改革、働かせ方改革、働くこと改革

官民を挙げて「働き方改革」の議論が活発です。私も生活とのバランスをとりながら働こうという方向性には賛成です。しかし、聞こえてくるニュースは残業時間の短縮や裁量労働といった「労働量」の話ばかり。労働生産性は「労働の成果(Output)」を「労働量(Input)」で割ったものであり、GDPつまり金銭的価値と時間によって測られます。

「残業はだめ。でも成果品はこれまで通り、メ切は明日まで!」では長続きするわけがありません。こうした体制や風土を変えずに時短を掲げても、それは「働かせ方改革」に過ぎません。経営者が価値ある仕事を見定め、労働者が創造的な仕事に集中できる環境を整えることこそ「働き方改革」だと思うのです。

建築設計者にとっての「労働の成果」では、設計料という対価を上げていくことも大事ですが、そのためにも縮小する社会ではGDPには表出しない文化的価値がアウトプットとして評価されることがより重要です。

「労働量」では、建築設計には「時間をかけなければ良いものはいない」という根強い観念があります。とはいえ、時間のかからない効率よい仕事ばかり求めたら、建築設計の文化的価値は上がりません。大事なことは、与えられるのではなく自らがワクワクするような仕事を見出すための時間を拘束しないことでしょう。

建築の設計者は、元来、社会貢献の意識が強く、まちづくりやボランティアに限らず副業の仕事をしている人も少なくありません。異分野に越境して仕事することが創造力の源泉にもなっています。GDPには現れにくいこうした活動が評価される「働くこと改革」こそ必要なのではないでしょうか。



**岡野 俊二** (愛知・正会員)

石本建築事務所名古屋オフィス (名古屋市中区 栄4-3-26 TEL 052-263-1821 FAX 052-264-1990)

大学卒業後、今の会社で26年。この年数だけ見ると「もうこんなに経ったのか」と思う。しかし何故だろう？ まだあまり仕事を覚えた感はない。ランチはいつも二人前だが、建築は一人前にもほど遠い。これまで何をやってきたのだろう？

ここ15年は学校の設計監理が多かった。というより途切れたことがない。おかげで今や学校以外の設計ができる気がしない。海外の仕事もいくつかした。アメリカ、シンガポール、メキシコの3カ国。そう言うときちょっと聞こえがいい。なので、内容と質は省略する。

最近感じるのは体に無理が利かなくなったこと。先日徹夜をしたら1週間体が戻らなかった。この業界は働き過ぎ。やはり働き方改革が必要だ。何と言っても健康第一。異様に拡張した自分の腹部を見る度に不安になる。しかしその不健康は働き過ぎではなく、ただの食べ過ぎと運動不足だと気づいている。そうか！ ランチも仕事も量を減らせば一人前になって健康になれるのかもしれない。



**富田 彰次** (愛知・正会員 [転入])

日建設計名古屋 (名古屋市中区 栄4-15-32 TEL 052-261-6131 FAX 052-261-6136)

はじめまして、このたびJIA 関東甲信越支部から東海支部に転入しました富田です。生まれ育った名古屋から12年前に東京へ転勤となり、今年1月に出戻り転勤で名古屋に戻ってきました。この10年で名駅エリアをはじめ名古屋の街は大きく変貌し、まさに浦島太郎状態ですが、「地元愛」を持って「想いをかたちに!」をモットーにこれからも設計に携わっていきたいと思っております。

**わたしのとっておき ①**

福岡県北九州市門司区



**川本直義**

JIA 愛知  
伊藤建築設計事務所

◎ data

**プレミアホテル門司港**  
所在地 | 北九州市門司区港町 9-11  
構造・規模 | 地上 9 階建  
鉄筋コンクリート、  
鉄骨鉄筋コンクリート造  
延床面積 | 17,690 m<sup>2</sup>  
竣工 | 1998 年 10 月

◎ data

**手作りケーキとカレーの店 ドルチェ**  
所在地 | 北九州市門司区港町 6-12  
TEL 093-331-1373  
営業時間 9:00 ~ 18:00 (平日)  
9:00 ~ 20:00 (土日祝)  
定休日 火曜  
焼きカレー 850 円

**レトロなまちによく似合うアルド・ロッシの遺作**

小倉から JR 鹿児島本線で門司港駅まで 14 分。そこから 500 m くらいの範囲に、明治、大正、昭和初期の近代建築が集積している。そんなレトロなまちに、イタリアの建築家アルド・ロッシの遺作となったプレミアホテル門司港がある。現代のホテルは歴史的なまちなみを台無しにしてしまいがちであるが、ここは逆に、存在感もありながら景観にもよく合い、レトロな港町の雰囲気をも高めている。

内部も素敵で、ホテルのロビーから関門海峡が一望でき大感激である。



た感じだった。門司は、またふらっと行って散策したいまちである。

**散策の途中は「焼きカレー」**

さて、門司港の名物といえば「焼きカレー」で、いたるところに焼きカレーを提供するカフェなどがある。ホテルから 150 m くらいのところのドルチェというカフェでいただいた。カレーとチーズの味がほどよく絡み合い、ちょっとおしやれな庶民の味といっ



隔月6回連載  
第5回

木造建築の  
語られ方

# ジャパン・アズ・ナンバーワン

竹内孝治 | 愛知産業大学造形学部建築学科 講師

最新型の人型ロボット兵器を見て、足がついていないことを心配する大佐。そんな彼に整備兵は、「あんなの飾りです。偉い人にはそれがわからんのですよ」と応える。1970年代末に放映された名作アニメに登場するこのセリフは、新技術が社会に受容される際の「語られ方」を描く寓話としても味わい深い。従来の概念とのギャップを受け入れられない上層部と、その認識の不合理性を嗤う技術者の対立。両者の溝を埋めるために「飾り」の足を付けるのは、まさに「蛇足」な作業だけれども、新技術は「技術的に可能」なだけでは実現できない。例えば電気自動車だってガソリン車と同じ形状である必要はないにもかかわらず、似た形にして新しい車もたらす認識の溝を埋め合せている。「飾り」をつけて社会に馴染ませる語り。

木造建築の「語られ方」を棚卸しする本連載の第5回は、1970年前後に流行した「住宅産業論」を手掛かりに、〈木造亡国〉の先に花開いた建築工業化路線が、その内部に〈木造愛国〉を忍ばせていた状況を観察したい。不燃建築の実現を託されたプレハブ住宅は、新技術だったからこそ、社会に受容されるための「語られ方」を必要とした。

## 住宅・未来・産業化

学生反乱の1968年は「住宅産業元年」とも呼ばれる。同年、通産省官僚・内田元亨(1925-1996)の論文「住宅産業－経済成長の新しい主役」(中央公論、1968.3)を契機に住宅産業に関する書籍や雑誌記事が相次ぐ。内田は日本経済を牽引する自動車産業の衰退を予測し、それに変わる「新しい主役」として、全く新しいタイプの住宅を安価に大量供給する「住宅産業」を位置づけた。これは当時、「住宅工業化」のみに目を向けていた建築家や建築技術者にとって驚きの提案だった。

興味深いことに、内田が語った「全く新しいタイプの住宅」は今で言うスケルトン・インフィルの大規模集合住宅だったのに、後に巻き起こった住宅産業ブームは、主役はあくまで低層戸建て住宅だった。結局は住宅の「産業化」という論点だけ、というよりも、「住宅産業」という言葉だけが一人歩きしたのが1970年前後のブームの実態だった。

内田論文が発表された後、雨後の竹の子のように現れた一連の「住宅産業論」たちは、蒲池紀生『離陸する住宅産業－未来産業への先発部隊』(1969)や竹中一雄『住宅産業－未来産業6』(1970)などなど、総じて来たるべき未来産業に住宅産業を位置づけ、その可能性を問うもの。この傾向は、当時流行していた「未来学ブーム」の影響が大きい。

この頃の日本は、東京五輪(1964)やベトナム戦争(1965-75)による特需の後押しで高度成長真っ只中。日本万国博覧会(1970)を控え、「バラ色の未来」の到来を夢見る未来像が数多く描かれた。そんな時代のアイコンがイラストレーター真鍋博(1932-2000)の鮮やかな未来画。世界的ブームにあった未来学は、高度成長期の日本にも日本未来学会(1967)を生む。小松左京(1931-2011)、川添登(1926-2015)が名を連ね、磯崎新(1931-)や黒川紀章(1934-2007)ら建築家も併走した。

一方で、戦時・戦後と一大テーマだった住宅合理化・不燃化を掲げる〈木造亡国〉路線も1970年前後にはすでに一大勢力を形成。日本建築学会の木造禁止決議(1959)、住宅金融公庫による不燃組立住宅融資制度(1962)、プレハブ建築協会設立(1963)などを経て、企業が供給するプレハブ住宅産業は、未来のリーディング産業と目される。「日本の住宅は、われわれのもっとも得意とする電子工業製品」と取り入れることが、先進工業国を追い越す秘策だと述べる内田論文は、未来学ブームが産婆役になって生み出されたマニフェストだった。

すでに1959年にプレハブ住宅の先駆「ミゼットハウス」(大和ハウス工業)がヒットし、翌1960年にはアルミやスチール、プラスチックでつくられた「セキスイハウスA型」(積水ハウス)が販売、企業による家づくりが展開していた。1971年には未来住宅を体現した「セキスイハイムM1」(積水化学工業)が登場。「なんと工場生産率95%」というセールストーク、軽量型鋼材のボックスユニットを連結させた家は、もはや庶民にとっての「家」概念なんて顧みもせず、「勾配屋根なんて飾りです」とでも言わんばかりの〈木造亡国〉派住宅が生み出された。ただし、一般受けするために、3年後には庇が出て、さらに後日談として勾配屋根が付けられる。住宅らしさの「飾り」は必要だった。

## 鉄骨愛国＝逆説の木造愛国

未来学とタイアップした「住宅産業論」は、日本論の影響下にもあった。海外有力紙でたびたび日本が特集された1960年代。日本論も多数投稿・出版された。例えばハーマン・カーン(1922-1983)は「21世紀は日本の世紀」と言祝いだ。敗戦で自信喪失していたアイデンティティを取り戻した日本。そんな日本の「未来」を託す産業として「住宅産業」が眼差された。

そもそも、大阪万博自体、三波春夫(1923-2001)が歌うテーマソング「世界の国からこんにちは」(1970)にせよ、岡本太郎(1911-1996)の「太陽の塔」(1970)にせよ未来論と日本論が入り乱れる祭典と化していた。「世界のナショナル」が日本の「伝統と開発」をテーマに出展した松下館も、「中宮寺本堂」(1968)に一目惚れした松下幸之助(1894-1989)が、設計者の吉田五十八(1894-1974)に依頼したものだった。

その松下幸之助が率いるパナホームも、軽量鉄骨造工業化住宅でありながら、日本(人)を愛し、その独自性を重視した。あの「ミゼットハウス」の大和ハウス工業も、会社名は「やまと」にちなむ。創業者・石橋信夫(1921-2003)は林業の家に育ち満洲営林庁職員を経てシベリア抑留も経験した人物だ。そんな彼は敗戦後の禿げ山を嘆いて鉄骨造による工業化住宅を志したのみならず、商品名に「白鳳」「春日」「若草」といった和風名称を付けた。両者の語りは〈木造愛国〉、あるいは〈木造愛国〉ゆえの鉄骨造住宅＝〈鉄骨愛国〉とでも表現できそうだ。

それだけではない。日本の伝統的住宅はそもそも住宅工業化の先駆であり、新技術によるプレファブ住宅がいにしへの伝統建築を起源に持つ。そんな「語られ方」も珍しくない。その典型が建築工業化手法、モデューラー・コーディネーションと木割りとの同一視だ。建築史家・内藤昌(1932-2012)による木割りの解説は、『モジュールと設計』(1961)などの技術パンフや『建築設計資料集成』にも掲載され、「わが国におけるプレファブリケーションの歴史は随分と古い」とプロモーションした(『歴史的にみた日本のプレファブ建築』、建築雑誌、1963.12)。

新技術としてのプレハブ住宅は、木割り・畳割りといった日本の伝統建築技術との連続性で語られる(川添登・黒川紀章『プレハブ住宅』、1964)。あの「セキスイハイムM1」の開発を担った建築家・大野勝彦(1944-2012)でさえ例外ではない。ボックスユニット工法の意義を語りつつ、「大衆化社会、情報化社会、工業化社会における『住まい方と住まいづくり』のプロトタイプ」を「現代民家」と名付け、日本の民家はその原型を求めた(『現代民家と住環境』、1976)。伝統木造建築は木造であること自体を捨象され、そこに内在する「システム」が抽出されることで、新技術の社会受容を促すツールになった。

## 現代「建築の日本」的性格

工業化建築の背後に伝統木造建築の「精神」や「システム」を見る「語られ方」は、戦時の「科学技術の日本的性格」を思い出させる。科学戦を戦う日本は、欧米の墮落した科学技術を、日本民族の道徳性や精神性で克服すると説明した。テクノ・ナショナリズムの登場だ。科学技術＝〈木造亡国〉に立ちながら、伝統精神＝〈木造愛国〉を奉る。その「語られ方」は戦後になっても「科学技術立国」「電子立国」として連続する。

実際、日本は敗戦の痛手から立ち直り、かつては粗悪品を意味した「日本製」が「メイド・イン・ジャパン」としてブランド化し、1970年代末には「ジャパン・アズ・ナンバーワン」として世界に認められていった。その尖兵となった日本家電も、「日本の誇り」や「心」「器用さ」といった精神性・道徳性が「日本的性格」の証と見なされ、1960年代に流行した家具調家電は、大和ハウス工業の「白鳳」「春日」と同様に、「嵯峨」「霧ヶ峰」といった和風名称で呼ばれた。新技術は伝統精神に接ぎ木して語られることで受容されたのだ。

そんな新技術の社会受容について未来画の巨匠・真鍋博は「SFアセスメント」という造語でもって説明している。「夢として語られ、想像されたものは人間はいつか抵抗なく受け入れる。まして絵になるというのはこういうものができてほしいと多くの人が望んだからで、結果的にイメージが浸透し、社会的に認知されていくのだと(『真鍋博の発想交差点』、1981)。でも、そんな方便としての語りが、新技術の方向性を縛り、さらには意図せぬ方向へ引っ張っていくことも往々にしてある。「語られ方」という足が一人歩きしていく。「全く新しいタイプの住宅」の社会受容に向け用いられた「語られ方」は、日本伝統木造建築という概念を多様化・曖昧化させていった。

ところで、4月から開催されている「建築の日本展-その遺伝子がもたらすもの」(森美術館)が話題だ。世界から注目される日本の現代建築には古代からの伝統が息づくという見立てで、木造建築も紹介されている。この展覧会の分かりやすさは、庶民が「抵抗なく受け入れられる」色メガネ、いわば「現代建築の日本的性格」ともいえる「語られ方」に下支えされている。あらゆる日本現代建築は伝統木造建築の継承者とみなせるほどに、木造建築の「語られ方」は爛熟を迎えた。



たけうち・こうじ | 専門は日本近代建築史。木造住宅メーカーの実務経験から得た問題意識のもとに、戦時から戦後にかけての住宅計画・生産・供給、わが国における住宅産業の歴史などについて研究している。主な論文に「建築家・内田祥文の「国民住宅」構想に関する研究」、「イラストレーター・真鍋博の未来都市観に関する研究」などがある。

# ローカルとグローバル. 二つの視点で東海支部を活性化

## 地域会相互の連携をより密接に、支部が活動の接点となる

車戸 慎夫 前支部長

矢田 義典 新支部長に聞く

——まずは車戸前支部長、2年間お疲れ様でした。2年間を振り返って感じたこと、新支部長に伝えておきたいことについてお聞かせください。

車戸 プレイヤー<sup>[K1]</sup>かマネージャー<sup>[K2]</sup>かという話に尽きます。この2年間を振り返ると、東京(本部)へ行って、東海(支部)で本部のことを報告する。本部ではプレイヤーの世界の話題はなくて、マネージャー的な課題の審議が行われている。登録建築家<sup>[K3]</sup>しかり、告示15号<sup>[K4]</sup>しかり、BIM<sup>[K5]</sup>もまたしかり。いずれもマネージャーとして、設計行為を経済活動としていかに確保するかの議論で、空間の質、建築文化の議論はなされなかった。マネージャー的事象は会員サービスと位置付けて、JIA会員はプレイヤーの心が社会的に分かるような運動をしていただきたい。とは言え、一方でマネージャーのセンスは絶対必要でその上で、矢田新支部長にはぜひプレイヤーの心でもってやっていただければと思います。

——ありがとうございます。「マネージャーのセンスをもってプレイヤーの心で」、とのことですが、矢田新支部長、2年間の構想と展望についてお聞かせください。

矢田 確かに私自身もプレイヤーでいたいなど



矢田義典さん

新支部長に、愛知地域会の矢田義典さん(有限会社矢田義典建築設計事務所 代表取締役)が就任されました。相変わらず会員減少・高齢化・財政難など課題が山積した状況ですが、戦略なき戦術では新しい未来は作り得ません。今回は卑近の戦術の話ではなく、主に東海支部が持つべき戦略について、車戸慎夫前支部長にも参加いただき、お二人の思いを語っていただきました。

思います。プレイヤー・マネージャーという話は非常に参考になりましたが、私はローカル・グローバル<sup>[Y1]</sup>という視点を軸に、2年間の活動方針を考えていきたいと思っています。具体的には主に4つの新たな活動を始めたいと考えています。

①建築家としてのグローバルスタンダードの周知とPR:CPDの有用性に基づく登録建築家の意義

②行政への働きかけ:災害時支援<sup>[Y2]</sup>・設計者選定業務のサポートを糸口に若手の業務受注への機会拡充

③四地域会の連携:地域会の枠を超えた合同の企画事業を通しての会員交流<sup>[Y3]</sup>

④出版事業:地域会による既往出版物の再編集および出版サポート<sup>[Y4]</sup>

大きな課題である会員増強も、単純に人数を増やすことが目的ではなく、その内容が大切で、まさに会の中でプレイヤーとなる若手の入会と循環が必須です。これらの活動が2年間で成果が出るかはわかりませんが、5年後10年後に花開き、若手が入りたくなる東海支部を形づくる仕組みづくりになればと考えています。

——なぜグローバルの視点が必要なのか? グローバルスタンダードの意味についてお願いします。

矢田 今の社会情勢を見れば、数十年後には日本の建築家は海外で仕事をすることが必然になると思います。例えばJIA会長が評定委員に加わっているAPECアーキテクト<sup>[Y5]</sup>というものがあります。これは加盟国間での相互承認が可能なアーキテクトとしての共通の称号ですが、その登録にCPDが必要になってきます。つまりCPDはどの国でも通用するグローバルスタンダードなんです。JIAではCPDを取得し、国際的(UIA)基準に基づいた登録建築家を推

奨していますが、これもグローバルの視点で見れば、とても自然なことです。このことをもっとよく知っていただくために会員へ広報しなければいけないと思っています。同様に、海外で積極的にBIMが導入されているのであれば、日本でも対応して当然のことですし、告示15号にしても、海外と比較して日本の労働環境と待遇が不十分なのであれば、整備するのが当たり前の話だと思います。つまり、これらの議論もグローバルな視点を持って議論することができず、日本国内だけで完結するような視点でしか議論できていないことに問題があるように感じています。

車戸 確かにそうかもしれない。しかし、これからは世界に出ていくと同時に、逆に世界から入ってくることになるでしょうね。

矢田 どちらかというとそうかもしれません。他国ではアーキテクトという称号がありますが、国際的にこれに横並びできる資格こそが登録建築家だと思います。そういう意味では会員全員が登録建築家という話は間違っていないのではないかと感じています。

車戸 ところでAPECにしろ、CPDにしろ、それは世界中誰もが平等に同じ権利を得られるという文明のシステムの話。必然的に制度化されてゆくのでは? 建築文化、空間の質を問う話こそJIAが取り組むべきことではないだろうか?

矢田 でも、私はアーキテクトと謳っている以上は、システムの話もJIAが主導すべきだと思います。世界ではどの国もUIAの傘下にある団体がやっているわけなので。日本のUIA団体はJIAしかありません。

——JIAがやるべきこと、という問い掛けですが、同じようにCPD取得事業を企画し、資格制度を持った他団体もある中で、JIAの特性

はどこにあるのでしょうか？これは新入会員（特に若手）の勧誘にもつながる話かと思いますが。

**矢田** 先日、指名願いを出し始めたという若手会員から、「最近、建築士会に入りました」と言われました。その理由を聞くと「士会の会合に出れば行政の人（会員）とも会える」からだそうで、これを聞いて驚くと同時に面白い話だと思いました。JIAにそういうメリットがあるだろうか、なければつくっていかねばならない、と。

**車戸** 私も同じような経験があります。勧誘してもなかなか入会しない若手に、その理由を聞いたところ「高い会費を払うよりも同じ費用で、身内で勉強会をした方がどれだけになるか」と言われました。そういった優秀な連中は、JIA会員であるかどうかにかかわらず、さまざまに仕事を得る機会を自らつかんでいたりする。…そうすると、JIAは質のいいCPDを企画すると、面白い事業をたくさんやっていくしかないような気がします。

**矢田** そうですね。団体には団体の良さがあり、JIAにしかない良さがあるはずですが、今、東海支部には四地域会があって、ほぼ100%単体で事業をやっていますが、地域会の枠を越えた企画を行い、活動を通じて会員同士が交流できる機会をつくりたいと考えています。その他に、行政への働きかけも考えています。プロポーザルやコンペで、若手にも門戸を広げるような活動をしたいと考えていますが、愛知地域会が先日行った岐南町庁舎コンペのシンポジウムのように、まずは仕事を出してくださいという話よりも、私たちは団体として、こんなサポートができますよ、と。まずは小さな取っ掛かりから入ってい

たいと思っています。もうひとつ行政への働きかけでは、三重地域会で実績のある災害時支援活動。東海は東南海地震が発生する確率が高いので、三重の実績を生かして、行政に対してJIAと災害時支援協定を結びませんか。支部で協定を結べば、ひとつの県が災害にあっても、他の3県から応援に行けます。そんな連携を取れるのはJIAだけです。

**車戸** つくることばかりじゃないね。サポートもやっていかないといけない。

**矢田** そうです。そこをきっかけに少しずつ間口を拡げていけたらと思います。その好例として、数年前に岐阜地域会が中心になって行った岐阜各務原キャンブ前計画[Y6]というまちづくり活動があります。現在、進行中の各務原市庁舎の設計に際して、市庁舎だけ良くしても不十分ではないかということで、キャンブ前計画の話をしたら行政が反応して、ここ2年間の内に岐阜地域会で関連事業を始める予定だそうです。そうすると「それをやりたい」という人が結構来るらしく、若い人にとっても魅力に映るようです。そうしたところで若手にもメリットを感じて入っていただけだと思いますし、そこを突破口に上手く循環していけば会員も増えて、もう少し今のJIAが進んでいる道にも理解をいただけるのではないかと考えているところです。

——新支部長の新たな戦略に対して、最後に車戸前支部長からエールをいただけますでしょうか。

**車戸** ひとつはせっきゃく愛知から新支部長として出るので、東海支部だからといって他地域を気にせず、名古屋・愛知の行政と距離をもつと縮めるようなことをしていった方がいい。



車戸慎夫さん

**矢田** 確かに東海4県の中では愛知が一番行政との距離が離れているかもしれないですね。そういう意味では行政への働きかけも、まずは地元愛知・名古屋で実績を重ね、最終的には各地域会から一人ずつ委員を出していただいて特別委員会をつくりたいと思っています。

**車戸** そうするともっと違う世界が出てくるし、いい意味で行政をマネジメントして、変えていくくらいの心意気でやってほしい。

**矢田** そうですね。登録建築家など、これまでに整備されたシステムの意義を再認識しつつ、より広い視点で新たな試みに挑戦していきたいと思っています。

——これまでの充実した継続事業に加えて、新たな試みが始まるということで、その成果を期待して会員一同支部体制を盛り上げていけたらと思います。今日はどうもありがとうございました。

[聞き手]

中澤賢一 |  
東海支部会報委員長  
堀内建築研究所



#### ●注釈

##### 車戸 前支部長

[K1] プレイヤー：建築において価値行為を純粋に追求できる立場だと思います。私は30年前に入会しました。当時プレイヤーとしての心があったので、物をつくりながら地方や地域に貢献し、自分の思いを建築を通して語ってほしいという観点でJIAで活動してきました。プレイヤーというのは失敗しても何かに残って、いい思い出になります。[K2] マネージャー：経済行為を成立させながら自分の価値行為を表現していかなくてはならない立場で、私の場合も世の中の発展に連動してスタッフも多くなり、次第にプレイヤー+マネージャーの心でやらなければいけなくなりました。プレイヤーに対してマネージャーの失敗は悪い思い出が多く、反省するばかり。[K3] 登録建築家：本部理事はマネージャー的な立場の方が多く、登録建築家として手をどう動かしているのかなと疑問に感じます。[K4] 告示15号：プレイヤーのフィーではなく「情報技術者（建築部門）」の人工の話であって、仕事の質を問うものではない。もちろ

ん設計料の確保は大切なことですが、いい建築ができるということとは別の話です。

[K5] BIM：安全安心な建物を間違いなくつくるということであって、空間の質が確保できるものではない。

##### 矢田 新支部長

[Y1] ローカル・グローバル：グローバルとは、海外の実情に目を向けつつ、JIAが示している現在の方針を今一度、全員で再認識すること。ローカルとは、四地域会が個々に行っている事業や各地域会の特性あるいは格差について、支部という枠組みの中で再度構成することです。

[Y2] 災害時支援：2017年10月の台風21号により被災した玉城町の家屋被害認定調査を、玉城町との直接契約で三重地域会が行いました。

[Y3] 四地域会の連携：支部大会が、2年に1度、東海支部会員が

顔を合わせるための会合という認識だけだったら、支部大会の開催よりも、合同事業による活動を通じて会員同士が触れ合う機会を作るほうが重要じゃないかと思っています。

[Y4] 出版事業：支部の収益事業としての構想です。それは全く新しいものをつくるわけではなく、例えば1～3巻が出ている保存情報を、4巻が出るタイミングに合わせて既巻3巻を再編集するとともに新しい情報を入れて、東海支部で出版するという具合に、既存の媒体を再度PRする意味も含めてやれたらと考えています。

[Y5] APECアーキテクト：APEC加盟14カ国が参加できるシステム。日本人建築家は3年間72単位で登録できますが、実績が住宅設計のみでは登録できません。他国の例でオーストラリアは108単位。

[Y6] 岐阜各務原キャンブ前計画：各務原自衛隊基地前の近年衰退した商店街の再生を目的としたまちづくり活動。岐阜地域会を中心に各務原市・他三団体、地元住民と共にワークショップを行い、活発な意見交換がされたそうです。

# 2018年度 JIA 東海支部・地域会役員構成 (敬称略)

## ■東海支部

### [相談役]

飯尾健太郎(静岡)

清水 一男(三重)

### [顧問]

小田義彦(愛知) 谷村 茂(愛知) 車戸慎夫(岐阜)

### [本部理事]

本部理事・支部長 矢田義典(愛知)

本部理事 石田 壽(愛知)

### [幹事]

副支部長 大瀧正也(静岡・地域会長)

副支部長 吉元 学(愛知・地域会長)

副支部長 山田浩史(岐阜・地域会長)

副支部長 豊田由紀美(三重・地域会長)

幹事長 澤村喜久夫(愛知)

幹事 石橋 剛(静岡)

幹事 浅井裕雄(愛知)

幹事 西村和哉(愛知)

幹事 森 哲哉(愛知)

幹事 寺下 浩(岐阜)

幹事 出口基樹(三重)

### [監査]

服部 滋(愛知)

大瀧繁巳(岐阜)

### [委員会・評議会委員長(議長) / 補佐]

建築家資格制度認定評議会 鈴木 武(静岡)

建築家資格制度実務委員会 野々川光昭(愛知)

継続職能研修(CPD)評議会 豊田由紀美(三重)

フェローシップ委員会 奥野美樹(三重)

会報委員会 中澤賢一(愛知)

建築相談委員会 清水孝昭(愛知)

東海支部統括委員長 水野豊秋(愛知)

総務委員会 見寺昭彦(愛知)

東海学生卒業設計コンクール特別委員会

吉川法人(愛知)

東海設計競技特別委員会 間瀬高歩(愛知)

東海住宅建築賞特別委員会 伊藤恭行(愛知)

子どもの建築学校委員会 鈴木賢一(愛知)

中部建築賞 服部 滋(愛知)

災害対策委員会 杉山貞利(静岡)

JIA25年賞審査委員会 谷村 茂(愛知)

幹事長補佐 鈴木慶智(愛知)

### [本部役員(東海支部関係分)] ※支部長・本部理事は前記

総務委員会 鳥居久保(静岡)

フェローシップ委員会 奥野美樹(三重)

広報委員会 奥野美樹  
(三重全国広報委員長会議)

職責委員会 鈴木 武(静岡)

職責等検討特別委員会 小田義彦(愛知)

財務委員会 鈴木利明(愛知)

本部職能資格制度委員 植野 収(愛知)

本部建築家資格制度実務委員 野々川光昭(愛知)

教育表彰委員会(CPD-WG) 鈴木利明(愛知)

近未来研究特別委員会 高木耕一(愛知)

ARCASIA大会特別委員会 吉元 学(愛知)

CPD評議会委員 豊田由紀美(三重)

JIA災害対策全国会議 杉山貞利(静岡)

JIA環境会議 笹野直之(愛知)

JIA建築相談会議 清水孝昭(愛知)

JIA保存再生会議 原眞佐実(愛知)

JIAまちづくり会議 尾関利勝(愛知)

JIA全国卒業設計コンクール 奥井康史(愛知)

## ■静岡地域会

地域会長 大瀧正也

副地域会長 大橋康孝

副地域会長 八木紀彰

運営局長・幹事 石橋 剛

財政局長・幹事 望月美幸

幹事 高島ゆかり

幹事 江川静男

幹事 高橋雅志

監査 花村芳夫

監査 尾林孝雄

東部部会代表 秋山 元

中部部会代表 三輪 豊

西部部会代表 村松 篤

アドバイザー 田中楯夫

アドバイザー 大石郁子

<委員長>

総務委員会 伊久美太助

会員拡大特別委員会 大橋康孝

ウォッチング委員会 江川静男

建築セミナー委員会	八木紀彰	三河地区会	黒野有一郎
建築相談委員会	鳥居久保	住宅研究会	竹中アシュ
災害対策委員会	杉山貞利	保存研究会	原眞佐実
広報委員会	鈴木俊史	法人協力会	中嶋慶一
会員委員会	三保久利	大学特別委員会委員長	久保田英之
		行政特別委員	吉村昭範

## ■愛知地域会

相談役	大塚一三
	栢本良三
	鋤納忠治
	森 鉦一
	福田一豊
	森口雅文
顧問	尾崎利勝
	服部 滋
	鈴木利明
	石田 壽
	小田義彦
地域会長	吉元 学
副地域会長	浅井裕雄(広報室・研究会担当)
副地域会長	澤村喜久夫(支部幹事長)
副地域会長	西村和哉
	(研修室・事業室・地区会担当)
副地域会長	森 哲哉(総務室・議長)
地域会長補佐	高嶋繁男
地域会長補佐	近藤万記子
直前地域会長	久保田英之
監 査	谷村 茂
監 査	水野豊秋
<室長・委員長・会長>	
総務室	見寺昭彦
総務委員会	村上貴彦
会員委員会	生津康広
広報室	伊藤彰彦
広報委員会	中渡瀬拓司
ブリテン委員会	中澤賢一
研修室	野々川光昭
研修委員会	宮坂英司
職能・資格制度委員会	関口啓介
事業室	高木耕一
事業委員会	上原徹也
建築相談委員会	清水孝昭

## ■岐阜地域会

地域会長	山田浩史
副地域会長	寺下 浩
幹事(会計)	大瀧繁巳
幹事(JIAの窓委員長)	内田実成
監査	山田貴明
監査	長尾英樹
ぎふ卒業設計コンクール	寺下 浩

## ■三重地域会

相談役	清水一男
地域会長	豊田由紀美
副地域会長	出口基樹
事務局	相原宏康(常任幹事)
会計	森本雅史(常任幹事)
監査	中村 久
監査	松本正博
<地区幹事・委員長>	
北勢地区幹事(研修委員長)	阪 竹男
伊賀地区幹事(総務委員長)	西出 章
中勢地区幹事(事業委員会建築文化講演会委員長)	
	山本覚康
松阪地区幹事	芳賀信次
伊勢地区幹事(総務副委員長・会員増強担当)	
	高橋 徹
総務委員会	西出 章
事業委員会 第1(文化講演会)	
	山本覚康
	第2(ウォッチング)
	川崎貴覚
研修委員会	阪 竹男
広報委員会	服部昌也
CPD委員会	豊田由紀美
研究・社会活動委員会	奥野美樹

## 古地図を持って静岡の街を歩いてみよう

春休み最後の週末、静岡市の中心部を古地図を見ながら歩くまち歩きイベントを開催しました。静岡の中心部は、駿府城の城下町としてつくられた街の構造が現代にも多く残っています。普段から歩き慣れている静岡の街だからこそ、あらためて解説を聞きながらまち歩きをすることで新たな発見につながるのではないかと思います。参加者は全部で23名、うち4人は小学生の参加(親子での参加)でした。

イベントの前半では、講師・案内役の塩見寛氏によるレクチャー「静岡の街の見方・造られ方・楽しみ方」が行われました。塩見さんによると、沼津や浜松も城下町だったが、今はその面影がほとんどなくなってしまっており、それらに比べ、静岡の街は城下町の町割りがよく残っており貴重だということです。

レクチャーの内容を簡単に紹介します。まずは「街の見方」です。塩見さんによれば、街を見る「視点」として、①街には計画の意図がありそれを読み解く、②街は時代とともに変わっていくが当初の計画意図がどのように継承されたのかを見る、③街には物語があり物語をつないでいく—といったことが大切なだそうです。では、静岡の「街の造られ方」はどのようなものだったのでしょうか。静岡は徳川家康が64歳で隠居してきてからつくられた街ですが、家康は8

～19歳の期間にも静岡に住んでおり、家康にとって静岡は「故郷」、最も大切な場所だったのではないかとのことです。家康が行ったこと(計画意図)は、①東海道のルートを「本通り」から「新通り」に変更、②武家地・寺社地・町人地による住み分け、③50間四方の町割り—などです。①は、名古屋から来て新通りに入ると富士山と駿府城が両方並んで見えることを狙ったのではないかとのこと、レクチャー後のまち歩きで確かめることとなりました。

後半は、いよいよ街に出かけ、1時間半くらいのまち歩きです。レクチャー会場の静岡県教育会館を出て、駿府城の外堀を眺めながら県庁、市役所を見てから、七間町通りを歩いて札の辻を見ます。途中、新通りから駿府城天守閣があった方向を眺めてみましたが、ビルのせいや雲のせい、富士山は見えませんでした。それから、常盤公園、青葉通りを通過して、途中で「矢沢煉瓦蔵」を外から見学しました。この建物は、明治時代に建てられ、静岡大火(1940年)と静岡大空襲(1945年)を耐えて残った建物です。見学していたら、所有者の方が出てこられ、現在の道路側ファサードは道路拡幅のときに壁の位置を動かしたということです。その時、足りない煉瓦は新しくしたそうですが、その新しい煉瓦のほうが劣化が激しいようです。まち歩きの最後は、呉服町や両

替町を通過して、浮月楼で解散となりました。

今回のまち歩きを通してあらためて考えたことですが、建築や都市というのは、「今、ここ」の場所をつくっていると同時に、そこに過去の痕跡を見出したり、さらには、未来の兆しを感じたりもするというように、歴史的な連続性を感じるきっかけになるのだなということを再確認しました。もちろん、このような感覚は都市や建築に限らないことですが、都市や建築といったことが人間の生活に近い分野だからなのか、ビジュアルに入ってくるものだからなのか、他の文化的な事柄よりは歴史を感じるきっかけになるような気がします。今の世の中の雰囲気とすれば、「歴史に対する感覚」のようなものはますます希薄になっていっているような気がします。あったものをなかったことにしたり、平気でルールを無視したり、先人が積み重ねたものを180度書き変えたりといったことが政治の場面などでも毎日のように見られます。大切なのは「今、ここ」だけじゃない、人間の文化的な連続性のようなものをあらためて感じるきっかけとなるイベントとして、今回のまち歩きイベントはそのヒントになると思いました。



石橋 剛 (JIA 静岡) |  
石橋修建築設計室・  
静岡地域会幹事運営局長



七間町通り



矢沢煉瓦蔵 (道路の反対側より)



呉服町通りの防火帯建築

## 図解で解決 空き家のパターン別すっきり解決法

中山聡さんの講演会を2018年3月2日、西アサヒ(現なごのや)にて開催しました。東京大学医学部を卒業後、信託銀行、近畿大学工学部、不動産系会社などに携わる異色の経歴の持ち主で、現在はわくわく法人rea東海北陸不動産鑑定建築スタジオの代表取締役を務められています。

今話題の空き家問題について、何か参考になることが聞ければと思います、この講演会を住宅研究会で企画していただきました。今回は一般の方々からも多くの参加がありました。

講演の中で、「人口が減るから空き家が増えるというのはおかしなこと。家の活用法は増えており、空き家になるにはそれなりの理由がある」とお話がありました。世代の偏りが激しい中山間地やタワーマンション、古い分譲住宅地で特に空き家が増えていて、その原因の多くは「人の問題」(所有者の問題、需要と供給の問題、相

続問題など)であるとの指摘でした。

大切なのは、①空き家の発生をなるべく遅らせるため、所有者の生活をサポートすること、②もし空き家が発生した場合にできるだけ建物の痛みが進行しないようケアすること、③家に誰かが住み続けられるようにし、空き家にならない期間をできるだけ設けること(人が住むことで痛みが進行しにくい)、④その後空き家になった場合には、空き家を積極的に活用していくこと—の4つで、それらを中山さんの会社ではワンストップでサポートされているそうです。しっかりビジネス化できていることに驚きました。

また、空き家にしない手法として、「百円不動産」という取り組みも紹介されました。百円でもいいので、次の所有者に譲っていくという提案です。個人間売買ならば可能で、誰かが使い続けることで建物が痛まず、資産価値も担保できるとのことです。空き家になったからとすぐに壊し

て更地売買するのではなく、特に田舎の場合、例え不便な場所でも、建物があることで利用の機会が開かれるということでした。リフォームの際には、現代風にしすぎないことが重要だというお話もありました。古い佇まいをできるだけ残すことで、その雰囲気を楽しむことができるようにすべきとのことでした。

愛知県や名古屋市はそれほど顕著ではないと思いますが、それでも人口減少は絶対的で、全国的に空き家は深刻な問題です。今回の講演でまだまだ空き家は利用価値が高く、多用途で使っていくことを考えると、ビジネスチャンスがあるのかなとも思いました。空き家問題を違った視点で見ることができ、大変良い講演でした。



宮坂英司 (JIA 愛知) |  
アトリエ創

## 環境ノイズエレメントを読む

3月10日に円頓寺商店街の西アサヒにて宮本佳明(かつひろ)氏のレクチャーが開催されました。レクチャー前には、同日開催の名古屋SPAバチ学会主催「旧中村遊郭と那古野界隈を歩く」に参加していただきました。

まちを歩いて見つけた「ノイズ」を収集し、コード化してまとめられたのが「環境ノイズエレメント」という概念であり、宮本さんの博士論文です。「そこでは古い環境を『素材』と見なし、それを物理的に「加工」ないしは意味機能を転換することによって、新しい環境が成立すると考えた。そして多くの場合、そのようにして新たに生まれた風景とは、ある種ざわざわとした異物感をもったものであった〜中略〜環境ノイズエレメントというコンセプトに基づいて計画される都市、すなわちノイズシティとは、都市のテーマパーク化という退屈な未来を逃れる唯一の方法かもし

れない」(宮本さん著書より)。

建物には寿命があります。そしていつかは死を迎えます。ただ私たちが普段まちを感じる要素は建物だけではなく「曲った川の流れ」や「橋」、「急な坂」や「霊の宿った巨木」などがあり、建物が壊されてもまちの記憶がすべてなくなるわけではありません。古い建物や美しいまち並みを残すことと同じくらい、何気ない日常の風景に時間のつながりを感じられることは重要であると考えます。風景とは「美しい景観」という意味だけではなく「私が周囲にあるものの本当の姿を把握し、私が何者であるのかを自覚し、現実を力強く肯定し、必然のうちに自由を見出す…、〜中略〜これが、世界と和解することの意味です。〜中略〜『世界との和解』とは、哲学の別名なのです」(『新風景論』より)。

まちにおいて建築空間をつくる時に大切な

のは、時間から切り取った静止画像ではなく、時や人の流れであり「動体」「流体」として考



宮本さんの話を熱心に聞く建築好きの市民のみなさん。建築家にとって夢のような光景です

えなければいけない。(構造主義におけるクロード・レヴィ=ストロースの「変換」のような)この考えの先に建築家の「カッコイイ」と女の子の「カワイイ」の融合ができることを望みとしています。まちの中の「流れ」を読み解くことが、これからの建築家のリテラシーとして求められるでしょう。

引用・参考文献(詳しい内容が知りたい方はぜひ読んでみてください):  
「環境ノイズを読み、風景をつくる。」(宮本佳明 著/彰国社)  
「新・風景論-哲学的考察」  
(清水真木 著/筑摩選書)  
「野生の思考」(クロード・レヴィ=ストロース 著/大橋保夫 訳/みすず書房)



吉元 学 (JIA 愛知) |  
ワーク・キューブ

## 会員設計の店舗併用住宅「一つ屋根の家」を見学

2018年3月2日、岐阜地域会で継続事業として毎年行っている「JIAの窓」を開催しました。JIAの窓では、会員はもちろんのことこの地域で活躍する非会員建築家や時には学生さんも対象に、建物見学と意見交換会・懇親会を行っています。参加者のスキルアップはもちろん、イベントを通して新たな出会いと交流を生み、JIAの活動を知ってもらうことで会の魅力を発信する事業です。

過去には、他県の建築家を招いての講演会、役場庁舎の見学、市街地のまちづくり運動、大垣のまちづくりに関する報告・意見交換会、CPD勉強会などを行いました。

今年度は、初めての試みとして、各務原市に会員が設計した店舗併用住宅「一つ屋根の家」(木造2階建て、1F店舗89.80㎡、2F住宅100.02㎡、PH5.3㎡、延床面積195.30㎡、夫婦と子ども3人家族)の見学会を開催しました。お施主さまのご厚意により、店舗併用住宅として実際に使われている建物の見学会ということで、大変貴重な経験になりました。

見学会では、実際にお店をスタートして家族で住んでみての感想、店と家の使い方、設計時に感じたことや設計変更の内容、建築家との打合せの体験談など、いろいろなお話を聞きました。併せて、設計をした建築家からも設計意図について説明を受けました。特徴的な白漆喰のような外壁と急傾斜屋根

は、お店として一目で覚えてもらえる意匠になっています。住宅部分でのお施主さまの要望は、①明るく広い空間②どこにいても家族が感じられること—の2点。外観のシンボリックな屋根を生かしてPHFまで吹き抜ける斜め天井と、構造部材とシナ合板の仕上げにより、ダイナミックで明るく木の風合いが柔らかな心地よい空間が構成されています。

店舗併用住宅ということで、北面と西面は住居の生活感が外に出ないように屋根のデザインが生かされ、住宅部分は南面と東面から太陽が燦々と明るく降り注ぐリビングがうまく計画されており勉強になりました。また、スキップフロア形式になっていて、日々の家事動線の工夫(1F店舗→2F脱衣洗濯→物干し)の話も聞くことができ、実際に見学もしてその空間を体験することができました。子ども部屋に関しては、腰壁上の空間が空いているため、プライバシーは保ちつつも何となく軽く仕切った感じを出すことで、一体感があり、リビングとの距離も保つことができる空間になっていました。縦につながった一体感により、どこにいても家族を感じられる「一つ屋根の家」が構成されていました。設計者から聞いたコンセプトと、私たちが体験させていただいた実際空間と、お施主さまの仕事と暮らし



漆喰外壁と屋根が特徴的な外観

の様子を聞くことで、より深く「一つ屋根の家」を体感し理解することができました。

その後、懇親会を「一つ屋根の家」のお店部分で開催させていただき、とても楽しい時間と学びの時間が体験できました。

4月に開催された岐阜地域会の通常総会でも今年度の「JIAの窓」の開催の承認をいただきました。この地域で活躍する非会員建築家や時には学生さんにも広く呼び掛けをして公益性を高め、オープンに岐阜地域会への参加を募り、相互の交流とスキルアップにつながる場をもてるように、またそれが会員拡大へとつながるように、今年度も昨年度の経験を踏まえ、事業の計画に取り組みたいと思います。



内田実成 (JIA 岐阜) |  
内田建築設計事務所



リビング



小屋裏からリビングを見る



1階店舗空間。お施主さまから感想を聞く様子

# 東海支部役員会報告

今回の役員会は、総会を直前に控え、次年度へのバトンを渡していく場であった。会員の入退会、支部事務局員の不在、建築ジャーナルとの関係の見直しなど、抜本的に考え直すべき問題点が顕在化され、次年度以降どのように整えていくのか、慎重に話し合われた感があった。特に事務局員の件は、会員と事務局員のかかわり方自体を今後しっかり考えていくべきことのように思えた。

そのためには、JIAの協力者（事務局員、建築ジャーナル）と、腹を割ったキャッチボールが大切になってくると思う。人任せ的な（他律的）依頼ではなく、自分たちでできるものは、自分たちで設える（自律的）運営も視野に入れるべきではないか。会員側の主張を前面に押し出すのも良いが、一歩引いて、協力者の意見を（傾聴し）しっかり受け止める会員の質も大切なカギとなるように感じる。

自律的な運営は、JIAの社会貢献性をも高め、世の中に受け入れられ存続していく団体となるカギになり得ると私は思う。



長尾英樹 (JIA岐阜) | meets設計工房

日時：2018年4月20日（金）16：00～18：00

場所：JIA東海支部事務局 会議室

出席者：支部長、本部理事、幹事10名、監査1名、  
オブザーバー（本年度7名、次年度6名）

## 1. 支部長挨拶

前任の事務局員さんが、総会前に辞められて、支部、愛知地域会の方々には大変ご迷惑をおかけしてすみません。しばらくの間大変だと思いますが、何卒よろしく願います。これから静岡、三重、愛知地域会の順に総会に出席させていただきますので、よろしく願います。

## 2. 報告事項

### (1) 本部報告

- ①本部建築家認定評議会（3/20）（植野）
- ②本部財務委員会（4/19）（矢田）
- ③フェローシップ委員会（4/5）（谷村）

### (2) 支部報告

- ①支部建築家認定評議会（2/17）（植野）
- ②JIA環境会議「第9回JIA環境懇話会」（4/16）・その他（矢田）
- ③東海卒業設計コンクール2018（5/26）（矢田）
- ④玉城町被害認定2次調査最終報告（矢田）
- ⑤JIA25年賞について（矢田）

### (3) その他

- ①退会届 正会員「今井賢悟（愛知）」（久保田）
- ②会員種別変更 「山内久高（愛知）」（久保田）
- ③退会届 法人協力会員「新東株式会社（愛知）」（久保田）
- ④退会届 正会員「中西修一（三重）」（奥野）

## 議 事

### 1. 審議事項

- ①東海住宅建築賞特別委員会2018委員長承認の件（吉元）  
・委員長を吉元学氏（愛知）→伊藤恭行氏（愛知）に交代 →承認

- ②入会申込み 準会員「久田佳明（愛知）」（学生会員）（矢田）  
→学生会員の取り扱いが明確で無いので、審議保留。

### 2. 協議事項

- ①2018年度 東海支部通常総会議案書（案）について（矢田）
  - ・資料誤記など修正箇所を確認。
  - ・内容を各々確認し、修正があれば24日までに事務局と幹事長にメール。
- ②2018年度 岐阜地域会持出役員会（矢田）
- ③2018年度役員会日程（案）（矢田）
- ④2018-2019年度支部役員構成（案）（矢田）
  - ・委員長暦長年の方で交代できる方は、5/26以降に委員長交代の審議する。（矢田）
- ⑤2018年度名誉会員推薦について（矢田）
  - ・支部として全員一致で清水氏を名誉会員に推薦することに決定。
- ⑥退会届が提出されない会員の対応（矢田）
  - ・三重地域会の名簿に残っていた既に退会されている、東芝産業機械設備さんは、本部確認したところ、登録されていなかったため、不備なく抹消とする。（奥野）
  - ・岐阜地域会内ですでに法人協力会員を辞めていた4会社については、本部の浅尾さんに長尾から聞いて報告をする。（長尾）
- ⑦アーキテクトの契約について（中澤）

建築ジャーナルからの意見：現在の原稿料（4800円/1ページ）で執筆者への原稿企画、依頼交渉、文字数調整、などそもそも編集者の仕事以外の仕事を毎回負担しており、そろそろ限界である。世の相場は原稿料のみで10000円/1ページが相場だと聞いている。（中澤）

### 〈契約変更の選択概要〉

A：ジャーナルさんの行う仕事は原稿が到着してから、編集実務（原稿整理、不完全な原稿の補完、見やすいレイアウト、正確な校正）のみ行う。原稿料は4800円/1ページへの交渉含む。

B：現在と同じ方法で企画・交渉・編集実務一式を行う場合は原稿料を10000円/1ページに上げる。

- ・9月までにプリテン委員会と話し合い方向性を決定したい。支部会費をどうするかも含めて考える。（矢田）

### 3. 報告

- ①支部監査について（4/6）（矢田）

### 4. その他

- ①本部総会について（6/26）（矢田）
- ②新事務局員について（矢田）

19日（木）に新しい事務局員の方を面接し、23日（月）から新事務局員の前田さんという方（前任者と同姓）に来て頂くことになりました。支部総会までは見習いなので、皆様から仕事をできる限り振らない様願います。尚、3か月間は試用期間で、その後雇用契約を正式にする予定です。

### 5. 監査意見（服部）

中部建築賞の構成団体が2つ抜け三重と静岡の建築事務所協会が抜けます。50回目の募集がされます。12月に五十嵐太郎さんを迎え50回記念講演会を行う予定です。50回記念の受賞者に寄付金をお願いすることになると思います。



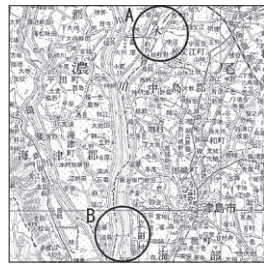
石田の「猿尾」



土木スケールの写真は撮りづらい。ケレップ水制を側面から撮ろうと立田大橋の中央部まで歩いたのだが満足のいく写真は撮れず。川下側の歩道に移動して下を見ると直下にケレップ水制が見られた。ドローンが有効か？



治水神社 (昭和13年御鎮座)



A 馬飼大橋「猿尾」  
B 立田大橋「ケレップ水制」

■発掘者のコメント

濃尾平野では木曾三川が分流、合流を繰り返しながら網の目状に流れていたと推定される。水との戦いの連続であり、輪中に代表される風土を生み出していた。多くの被害とともに、肥沃な土地も手に入れることができた。

多くの治水事業のうち代表的なものとしては慶長年間の「御圍堤(1609)」、「宝暦治水(1754-1755)」と「明治治水(1887-1911)」があげられよう。「御圍堤」と言えば尾張側の堤を三尺高くしたこと悪名高いが、あえて言えば、この地の地盤構成が西に傾いている地勢上の合理性も考えられる。

「宝暦治水」では油島で揖斐・木曾川(この時点

では、長良川は木曾川に合流していた)を分流するための締切が施された。千本松原が遺構として残り、国営木曾三川公園に隣接する治水神社では薩摩藩の陣頭指揮をとった平田朝貞を御祭神として祀っている。この締切に先立ち馬飼大橋北の石田・八神あたりで木曾川右岸に見られる「猿尾」を設けた。木曾川の水量を減らすために旧佐屋川(廢川)へ流すことを目的としていたためか、河口に向かって斜めに突き出す形状となっている。石田では「猿尾」の根元部に現役県営渡船場がある。

「明治治水」では三川の完全分流が目論まれ、オランダから招聘されたヨハネス・デレイケによる現地踏査に基づく計画案で施工された。木曾川と長

良川を背割堤で分離し、木曾川では川の流水速度を抑えるために「ケレップ水制」を設けた。これは石を粗朶と木杭で固定し中央へ向かって堤に対して直角に突き出させている。当初は400カ所近く設置しようとしたが、現在では治水の役割は終え、立田大橋付近の右岸で遺構が見られる。土木学会では選奨土木遺産に指定している。

「輪中」「猿尾」と「ケレップ水制」そして現代の堤防と、時代ごとにおける人と自然との付き合い方を示しているように感じられる。

林 廣伸 (JIA 愛知) |  
林廣伸建築事務所



登録有形文化財

萬福寺



本堂正面(東側)



山門



鐘樓



■紹介者コメント

萬福寺は林桂山と号し、弘仁6(815)年最澄の創立と伝えられている、貞永元年(1232)了誓法師の代に天台宗から浄土真宗にあらためたという。

寺の敷地は、東および南側を巾の狭い道路に接し、古い時代の面影を残している。本堂は敷地西側のほぼ中央に位置し、東を正面に立つ。建立に関する記録によれば兵火や火災により4回焼失している。現在の本堂は明治32(1899)年完成で、この地方で活躍した棟梁小野田又蔵の最盛期の作品である。桁行9間、梁間8間、木造平屋建て入母屋造、本瓦葺き、建築面積603㎡。外陣・矢来内・余間・内陣など仏事式の間取りで大型の真宗本堂の平面に三間向拝が付く。外陣・矢来内は

小組み格天井、余間は折上小組み格天井、内陣を二重折上小組み格天井と各室にふさわしい秩序がある。大きさを感じさせない外観や小組みの格天井が修復された金貼りの装飾物等と調和して美しい。平成24(2012)年から平成26年に本堂の半解体修理などが行われたが、古材を積極的に使用したと聞いている。

東側道路と接し、堂の前方に建つ山門は、桁行1間、梁間2間、入母屋造、本瓦葺きの四脚門で、棟通りに円柱4本を立てて門口としているのが特徴である、全体に入念な装飾を施し、建築的にも質が高い江戸時代末期の遺構である。天保15(1844)年の再建と考えられる。

境内南東方に位置する鐘樓は、石積み基壇上

に棟を南北に通して建つ。桁行1間、梁間1間の入母屋造、棧瓦葺きである。軒は二軒扇垂木、詰組の禅宗様を基調とした装飾密度の高い建築である。文久2(1862)年の再建遺構と考えられる。

12月に3日連続の報恩講が開催されるなど、この寺院では日常の活動が積極的である。

所在地: 知立市上重原町本郷27  
アクセス: 名鉄三河線重原駅下車徒歩3~5分  
文化財指定等: 2015年11月17日登録 本堂(23-449)、鐘樓(23-450)、山門(23-451)  
所有者: 宗教法人萬福寺  
問合せ先: 0566-81-0856  
参考資料: 登録有形文化財所見ほか

福田一豊 (JIA 愛知) |  
福田建築事務所



公開1次審査せまる  
**第6回 JIA 東海住宅建築賞 2018**

名古屋工業大学 NITech Hall にて

## 審査員

塚本由晴 (審査員長・アトリエワン共同代表)、  
鍋島千恵 (TNA 共同代表)、末光弘和 (SUEP.共同代表)

## スケジュール

- 公開1次審査 2018年6月30日(土)  
各応募者と質疑応答のある審査員3名によるパネル審査
  - 2次審査(現地審査) 2018年7月28日(土)～29日(日)  
1次審査で選ばれた6-7作品を現地で視察、応募者や施主と質疑応答
  - 最終審査および入賞者発表 2017年7月29日(日)  
結果発表および受賞作品へのコメント
- 場所：名古屋工業大学 NITech Hall (公開1次審査・最終審査)

JIA 三重 環境セミナー2018  
**風のかたち 熱のかたち 建築のかたち**

末光弘和氏講演会

- 日時：2018年6月16日(15:30～17:30)  
場所：レーモンドホール(津市栗真町屋町1577三重大学)  
近鉄名古屋線江戸橋駅徒歩15分、  
三重大学南門から東へ徒歩1分  
定員：約50名(入場無料・当日先着分)  
お問合せ先  
JIA 三重事務局 (Hiro 設計室)  
TEL 0595-96-8175 Email hos@pure.ocn.ne.jp

YKK AP・三興商事レクチャー  
**静岡地域会 第1回 JIA 塾**

アルミ防火窓・中大規模木造

日時：2018年6月15日(金)

## スケジュール

- 第1部(15:30～16:00)  
「アルミ防火窓の認定、法改定について 告知」  
講師 YKK AP  
今後、法改定が予定されているアルミ防火窓規格についての告知をお願いします。
- 第2部(16:15～17:15)  
「中・大規模木造を接合(工法)から考える」  
講師 SMB建材(三興商事)  
時代のニーズに合わせ進化を続けてきた木造業界。木材が製材からより品質のばらつきの少ないエンジニアウッドへ進化したように、木材の接合部は伝統継手から金物へ進んでいます。現在、各メーカーが独自の技術を用い中・大規模木造をより簡単に安全に、経済的に設計できるよう取り組んでいます。今回サミットHR工法を中心に、構法・コスト工程などについてわかりやすく解説していただきます。  
会場：ペガサート7階 小会議室1  
定員：20名(会員・非会員)※学生は無料  
会費：1,000円

## 地域会だより

### <東海支部>

- 5/11 支部通常総会
- 6/26 本部通常総会

### <静岡>

- 4/13 4月静岡地域会定例役員会
- 4/23 静岡地域会通常総会  
総会記念講演会 山辺豊彦氏  
「地域材を活用した中大規模木造建築物の設計」
- 6/15 拡大委員会、JIA塾
- 7/13 7月静岡地域会定例役員会
- 8/10 8月静岡地域会定例役員会

### <愛知>

- 4/13 JIA愛知役員会
- 4/27 東利恵講演会
- 5/26～5/28 住宅研究会 ベトナム旅行
- 5/17 NAFレクチャー第1回

6/11 素材を訪ねる旅

- 6/20 NAFレクチャー第2回
- 6/27 腰原幹雄氏講演会

### <岐阜>

- 3/2 JIAの窓  
住宅見学会「一つ屋根の家」(後藤様邸)
- 3/3 第17回ぎふ建築・生活・芸術系学生・生徒優秀作品展 合同講評会  
主催：日本建築学会東海支部岐阜支所
- 4/5 JIA岐阜役員会
- 4/17 岐阜地域会通常総会

### <三重>

- 6/16 末光弘和氏講演会
- 7/13 会員研修1
- 9/21 会員研修2・森羅万象匠塾
- 12/7 会員研修3

# 弔りこころ、大切な葬儀

## 葬儀のこと、お応えします。

一柳の葬儀は、各種・価格を段階的に用意いたし、ご希望される予算に合わせてお見積りいたします。宗教・宗派、葬儀規模の大小にかかわらず、全ての葬儀に丁寧にお応えしています。

いちやなぎ斎場は、365日・24時間、いつでも病院・施設等から直入れれます。

### いちやなぎ中央斎場

名古屋市千種区千種二丁目19番1号  
TEL (052)745-1212

### いちやなぎ野並斎場

名古屋市天白区野並三丁目538番1号  
TEL (052)899-0111

◆葬儀のお申し込み◆お問い合わせ◆事前相談は

TEL.052-251-9296

365日・24時間 一柳のスタッフが対応いたします!

日本建築家協会東海支部 特約店



株式  
会社

一柳葬具總本店

<http://www.ichiyalagi-sogou.co.jp>

### イチヤナギ倶楽部

- 入会金1万円のみで掛金不要、基本価格の2割引と交通事故傷害保険の特典取得
- 相続、遺言、後見制度など相談先の紹介が受けられます



## 編集後記

●会員の皆さまからの投稿によって約10年続けてきました「東海とっておきガイド」ですが、東海4県を対象にしていたから、「建築」と「食」をセットで紹介するネタがそろそろ尽きてきたのではとの声も出てきました。そこで、3月に100回を迎えたのを機に、対象地域を限定しないことにし、さらに「建築」の紹介は必須とするが「食」の紹介に限定しないことで執筆しやすくなりました。名称も改め「わたしのとっておき」としてスタートさせました。まずは編集委員が例を示そうとのことで、今回は私が書いてみました。相変わらず「建物」と「食」の紹介という組み合わせにしましたが、「食」の代わりに「小説」とか「映画」とか、いろいろ組み合わせが考えられますので、今後皆さまからいただく投稿を楽しみにしています。(川本直義)

●JIA静岡発の“まち歩きウォッチング”に触発された訳ではないが、約40年ぶりに名古屋の駅西、中村大門界隈を歩いてみた。「○○ツアーズ」とやらの企画に便乗したものであるが、久しぶりのこの界隈もご多聞に漏れず、生活に慣れ親しんだ建築物が次々と取り壊しの憂き目にあっている。旧遊廓で料亭を営んでいた「稲本」も近々取り壊されることが決まっているらしい。この辺りは旧遊廓の中でも高級なお店(タナ)が集まっていたところで、旧松岡旅館になっていた「酒井」や「四海波」といった名だたるお店が軒を連ねていた。現在の第一赤病院(旧県病院)のすぐ南側辺りがこのエリアで、旧中村遊廓は北の格式の高いお店から南の低いお店へとエリア分けがなされていた。現在この地区にはボランティアの案内人なる人たちがいて、遊廓文化を後世に伝え継承していく努力をしている。1937(昭和12)年頃の全盛時には娼妓2,000人を有する全国一の遊里であり、「廻

し」をしないというプライドの高いことでも全国的に有名なエリアだったらしい。私の興味を最も引いたのが最南端にあった「旧成駒屋」というお店だったが、このことについては次の機会に…。(原眞佐実)

### ARCHITECT

第357号

発行日 2018.6.1 (毎月1回発行)

定価 380円(税込み)

発行責任者 車戸慎夫

編集責任者 中澤賢一

編集 東海支部会報委員会  
愛知地域会ブリテン委員会  
建築ジャーナル内  
ARCHITECT 編集部

名古屋市東区泉 1-1-31 吉泉ビル 703

TEL (052)971-7479 FAX 951-3130

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル

TEL (052)263-4636 FAX 251-8495

E-Mail : shibu@jia-tokai.org

<http://www.jia-tokai.org/>